



凡  
月夜話

編

二

13  
3039  
2





3039  
2

# 髻が言事

徳田洋行 徳田村 相成

傳記 半月夜話卷之二

江戸

白頭子柳魚編次



# 相成

## 第三回 程雲井鳥蹟

笑ふや山里のうらひとて虫の音の千草のさうさうと。昼を以て寂とて。流  
 の流の松吹風は和くて常は溜く。それらも哀れを添ふるまを  
 おもひて後行者が鉦鼓の音清くして遠く研はひた斬りぬる  
 小露の頭へ滴り出。蓮の姫は対ひ談より如く遠  
 親族の近人の他人と。四歳前より西も東もな此國一移居り。ま  
 何くれとなく朝夜は真成に世話してするは情いつの世も心れぬ。心  
 寔に。まよての親子も有らん。最ん怪し縁されとさる







頼この、くくあふひのの。七夜もくぬ其そのうちは姫宮の虫の業をして愛  
 かの山の朝の娘のそれが若く病を産後の病若く毒ををさるる悲しく  
 何も言はんよふもかく只は暮る親皇の残くもひに水菫の娘とも  
 姫宮ともんものうて。肌を脱ぎた今後は持たぬれ。これは膚と  
 のひくけて襟と完く懷の守護命の中にあり。短冊一枚とうつと  
 小露は速と手をとりあげ押敷たて讀くともいふ  
 亡しるる程の雲井はなどつとも空の月のめぐ逢ふまで  
 と墨色伊美ぐく出かくと。小露の數回これを吟み。扱ひこれと  
 そうといふけあくもの震筆とてありらうと。ともいふたらのがと言はして  
 口を封じく見合せ何も心を領く再び連はふ對ひ妻のよけ

れと餘人は斯る物を持ちあふが知られらぬ禍が釀とうといふはり  
 出さん必ず知れらぬそ大事はうけて持ちと返せば蓮の受取く  
 元のといふもあらうと。吾倚も然といふと。今日とも你とと語らぬ  
 秘置これと斯親子の如く睦と相譚の中にあれの竊は見せまひら  
 せく今物語り。姫宮は世に存命といふままに你と同じといふ  
 るらんといふ。愛執を忘るひまるあらうと。意の中には娘とも孫と  
 頼む小露は前此うとも見捨ぎふ不便とうけてあらう。といふはり  
 小露も何が扱縦頼むらぬといふと。あらうといふ。心氣づからぬ  
 各よ妻の夫の修け者はあらうと物は今のうち調え来らん長間  
 連の更も竈の下焚付くらう。どれ一走といふと裙引あげ精悍く



も出まゝぬ蓮の心の竈の下柴折ぐべんととる適奥より以前の後  
行者が痛祖母様と返出く袖まきりて歎と見く。姫の真覚頼事  
わ你的夢みや見ぢふ欵お又物もやねふ吾倚を祖母と何言を  
いして終り者心付餘りの支の嬉しくさふりあべた吉又も前後不審  
なふり理られ赤女細の容子の小露殿語りぢふ余はかゞ仁間の  
裡にて是彼と一五二なりれぢく先刻より涙みせびりり実の  
你的長男逸松が娘まで一衣とひる者よと云れが妾が為る祖  
母様かれと云く蓮の眉を頻辱り何といふ逸松が娘と何故それか  
男の形で回國するといふ公の難く最前你がいひぢふが今日亡く  
の思目とる逸松が子といふうらな扱の吾子の毒を去りて阿羅漢

うらな奈何ぞや赤女と容子な疾くといそがしければ一衣のいそ蓮  
る涙と云れと云い奈何も入内故つぢ出く所と方と流浪志  
て河内の國一家村といふ所へ吟め来り。縁ごとそあれ妾が母れ  
家に入り螟蛉婿となり。妾が産せむひく後祖又様祖母様も世な  
去り。妾の又同のあつぢ壯客の子玉丸といふ人と襦袢のうらりり言号  
せし。奈何も故もや其玉丸といふ人八十歳の時河内の國と出く花  
浴ふ登り。敦実親皇さまとやう人給事と風の便もやれど其比ハ  
妾女もやご幼稚比の吉又も弁(さうり)りりり一昨歳の昔かへん  
も母内も疫癘まで猛小世な去りりひ急は孤となりて詮方なり。  
玉丸様が便りり心細くも只一個花浴(登り)敦実親皇様と喜守ぬ



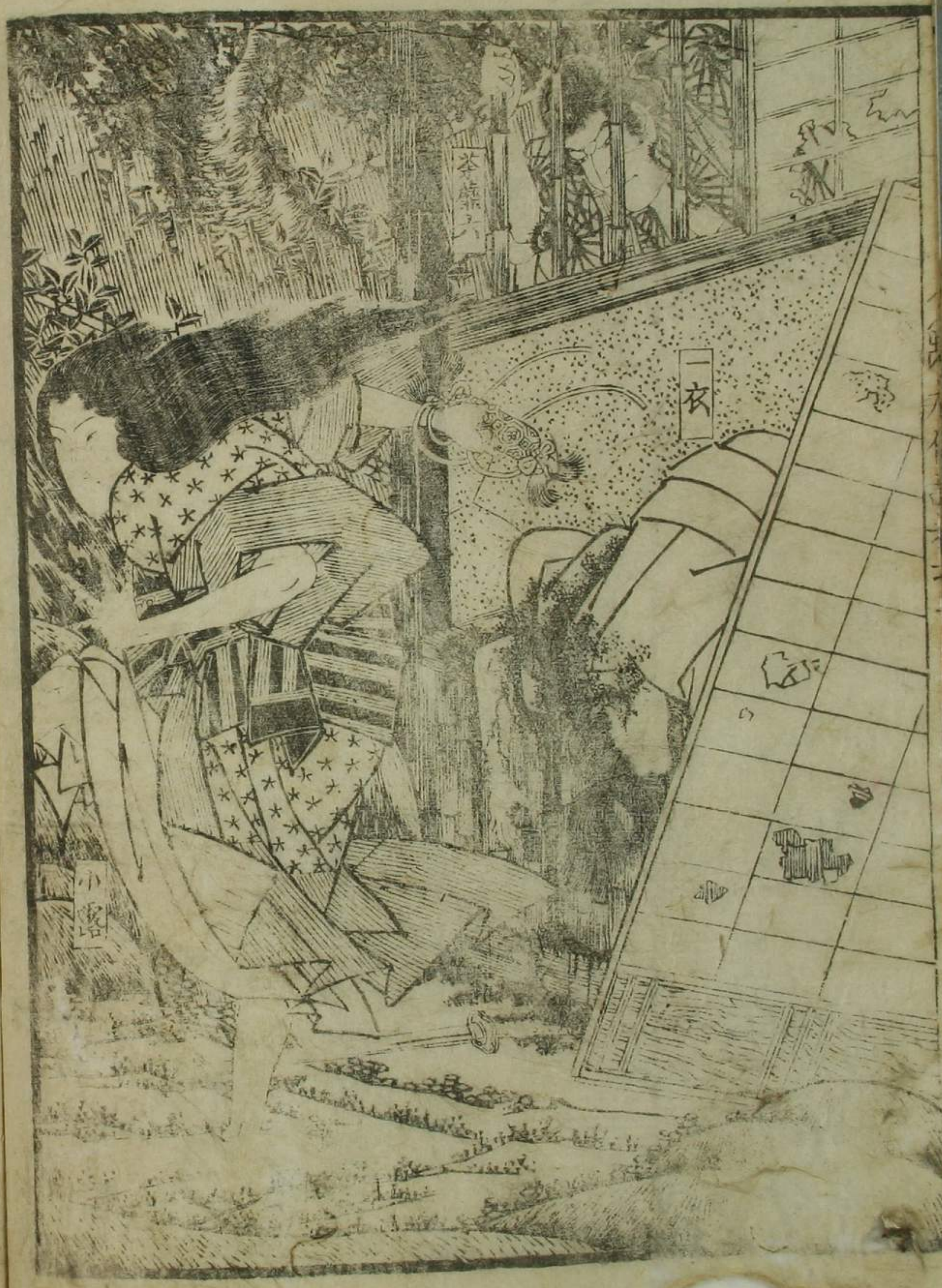
ふこそ奈何親皇様へ去る寛平五年に謀叛をなして来心く亡び  
 とす月つづれ既に死せんとす。されども尙や存命居りふ古又  
 墓をたれり力ありて諸國を廻るそのうちも女子の次女を人へ侮ら  
 るといひ且人肉経紀を引され肌を穢しとありやと故意漢児の  
 次女を妻に迎國終行はち扮し普く國を言するもの。只言号といふ  
 のこみて両支は幼兒時るれが顔もろく見ね縦今も遇がとて返り  
 それと名をあらねば夫婦とあるべしやうなく。爰に豫く話して心  
 故つとすりのめ何とやんなる。尙や耶縁の人やと尋ね来りし  
 甲斐あつて思ひげけり祖母様を環念する其嬉しき推量有く玉とれ  
 うと涙を流し物語れば蓮の姫も引寄て叔の孫もあつたりり容子と

第一とありり定めて幸なれば伯母が上姫宮の事かんと詳し知  
 てやあふんむらん不仁な子程可愛くと家出してより世余年雨  
 小つけ聖まつけ何処奈何して居るかと忘るるあうりし扱  
 年来河内在る妻が誘ひ子を儲け斯健は云月よふ実親  
 子と逸松がまう面影は似たりと子で子はあな時鳥八千八百な  
 りばと往く返らぬ冥土鳥とありてそし牙ぞうあうれり手も  
 取く歎くが涙を流す最前你が亡父の命日ありといふ  
 畜餘知ごふみりり吾子の命日ありんら老少不定といひ  
 老驍たる枯木の残る若木の枝ハ皆散りて根を飯り秋の風無常  
 迅速定むる兒有為轉病の世のるふ你の東道の返るまで





小露毒と  
蓮を殺し  
震華の短  
冊を奪ふ



一衣

小露



此家よ田舎りてくべき侍の家の仏檀を逆かへり日向せん南無阿彌陀佛と唱なあつ。やをた立た近江に出い夕ゆふ濃のいと垣い重し我家ののと樞し引ひめてまほくとしてい入いりり

第四回 邊邑蟬時雨

小露の旅の修行者まひらとべれ物を調と我家の門邊を飯を来き  
つ向むの山の岫に眺望を御み降り白雨も此時全晴れ夕陽差  
明までは照輝を露を梢に移り涼く清風の残暑を吹をひて  
快事限りか。小露の不憶も躊躇て額を手をかき最前の儼  
雨をや日も暮ると想ひ今暗波を女を視れ日は  
高く秋の頃の日の末の朝のひもひもらせん

時昔のやうな時昔とい。それを時昔とい。妻假初爰に接住す  
し。時昔今と心ひ。四歳をなら白駒の隙をとらことの  
かどて如斯もならぞやかんと獨言つ只在木の根を腰をとうけて。  
霎時やらら適は一疋の蟬忽然として飛来り梢の露を吸んと  
てうらら枝をとまりを發して高く鳴く裡一回ら修行者ん  
端近く立出く耳が清く。知らぬ東道主の小露蟬は信と  
眼をつけ昔齊王の后ま王が怨で死を其口亦及て蟬とか  
庭の樹上登りて嗟疾して鳴齊王是を悔み哀で齊女  
と号く蓋蟬は數種あり。詩は五月鳴蜩ありとの秋の月鳴て色紫と  
蟬と名づ頭上花冠あり胡蟬との秋の月鳴て色紫と



るる蟬けいことりの形かたち小こして赤色あかいろるる寒蟬かんぜんとりの音ねり  
して鳴なるとあせんとりの又また蟬せみは五徳ごとくありと所謂いふ五徳ごとくの頭かぶ上うへま  
縷いとある文ぶんあり。氣きが含くみみ露つゆを吞のみ清せいなり。未ま奈な櫻おうが亨かうじらるる廉れん  
之居この處ところ巢ねはよふらるる儉けんなり。時ときは夜よに候まをに守まもるる信しんなり。其その  
朽木くちぎの中なかは生なまして是これが復ふく育いくと名なづく。地ちよは出いて化けして蟬せみと  
あり。と王充わうちゆうが論衡ろんけいの蟬せみ復ふく育いくより生なまじて背せが開ひらく出いづといふ  
ものこれこれの熟物じやくぶつの心こころが素するふ朽木くちぎは生なまざる細少さいせうなる虫むしなり  
時ときをぬると羽はと生なまじて心こころのまじく宇宙うちうが飛ひりく。人ひとも容易やす  
登のぼるがた高たかと梢こゝろはとまじく貴人きじん高位こういも眼がん下かに見みざる。  
あつらふ音ねく鳴なむる四林しりんは満みちて遠とほくゆきもこれこれはよふて現まる

時ときは吾われ賤けんした土民どじんの子こと生うまるといいども亦またくも人ひとの種たねをぬ  
竹たけの園その生なまは給たま仕つかし。然しかも君きみの遺命いめいはよふて惜おくくぬ命いのちがの  
をぬり。時とき節せつがまじく人ひとが其その為ためは女子むすめの次女つぎむすめは身みを宴やまつして年とし  
来き此こゝ処ところは躲かくれ住すむ。尚なほや相譚あひかた人ひとのやと色いろが以もつて心こころをひた見みか  
が以もつて人ひとを伏ふくさし。斤へん時ときも大議たいぎを忘わすれねど邊邑へん村落そんらく一人  
として機密きみつを告つて共侶ともは商議しょうぎ人ひとといふ人ひと傑あか。可あ惜な月つき  
日ひが虚うつろくくささ草葉くさざとの陰かげより親皇おんみまのいひがひらりとあひひる  
人ひと叡慮えいりょの短尺たんせき奪うばひ取とり幸さいひある哉や比舍ひしゃの老女らうにょ蓮れんがおちをよ  
内製うちせいの短尺たんせき奪うばひ取とり這奴こが不便ふびんなかる功こう害がいなり。渠かが女にょ  
挿頭さうずが肚はらは出生しうじつなり。皇みま子こと偽いつはりり時節ときせつがまじりて花洛はならく



まじく帝と癢して位より高き楯の高座榎家清花の  
高位高友眼下に見下し。宇宙よりひらる當時こそ彼去月より  
背中穴開く出する蟬の雲井は登る時節倒来吾本名の玉丸  
も今の假名の小露といふ今より彼知る蟬をかそと蟬丸  
とこそ名告べ。敦実の忌日は當りて無越品の我眼よめるも  
主君の聖聖魂導すさめり彼一品よま手よりどが大望成就あり  
ふあふ人阿那悦びや嬉しむといふを音さ日來は似む男に  
るも又恐し。斯る時しも西南の方より一陳の風颯と落く来り。  
今を梢は鳴る蟬は前より川は吹落せば忽逆まき氷はま  
れ矢より速く眼眩く川下流れゆれば小露の蟬丸は

これ見えて色を妻人。不吉も已心り。われ吾名よまそ。寒蟬  
の目前風は吹落され流れり。吾大望成就るる天の志  
せ。縦遮莫諸國を巡り。軀方々くひ竹旗揚りて主君の吊軍と  
す。運は尽るる御宗く只陣殺して武名なとめり。何れ左もあれ運が  
おつら製製の短冊此方奪取こそ肝要なれと揚言つ立あがり。四下  
見廻し帯を直し。こごと木屐の音をた。今飯り来り。面色  
く。樞は明人と。も。始終を物色終行者の納戸。は。終  
り。ね斯と知らねが裡面より。姨はこそ待不樂とよ。當  
村の店より。隣邑を往り。ひの外は時。は。姨はく。  
呼びとつれど裡みあらねが納戸。は。親を扱。姨はの飯れ。終行

單し事し



者殿も旅勞れて今もよくと睡るいとつるおこ公起さん心こころきくいと咳せき  
 ごとく窩裡より合手出くあしと一口の外敦実親皇おんが無念むねんなるいと  
 内帯うちのお拔ひそがめて左視右視庭にありあふ手水鉢みづは寢ね又また合あ  
 せ心こころは右みぎ此舎このの方かたと拔足ひきして双ふた心こころびびより納戸のりよりお吾郎人わが  
 俣まねとこあうけてう穴あな出いるで終行者しゆう蟬丸せみの手て早くはや双ふたを袖そではめくく  
 この最前さいの終行者しゆう殿の吾郎人わがと誰たれ縛むすと顔かほをかめて恨うらめい  
 げい合手あしてあひあと涙なみだを拂ぬひ誰たれ縛むすと情なさけありお女を容ゆる次つぎ女をのあまい  
 ど突つの敦実親皇おんは勤仕きんせし玉丸たま様さま妻よめも男子おのは歩あゆいと突つの  
 女をして君きみとい襦袢じゆばんのあらいより言号いひせし一衣ひともいていべりいといふ  
 女をめて蟬丸せみの音高ねく人ひとやあ原はら来き吾故御内國わが一家いけ

るや松まつが女をもありいよお其その又また一衣ひとが何なんホの色いろも男おとのあまいはいてい  
 こららこらこら瓜田國うりさるらぞ定さだめしい涼すずきい譯わけありお人ひとその後のちとい怨うら  
 くと向むかもせん向むかられもせん吾侪わがの急いそは比舎ひまで行ゆねいばいぬ事ことあ  
 れいばい休やすめいとありいはいといといをい猶なほルい  
 ともいはい隣となり行ゆと宣のたまふい蓮は殿の殺ころしいぬいはい製せいといの短冊たんが  
 奪うばふ心こころでい有ありいぬい隣となりのい蓮は殿の殺ころしいぬいはい製せいといの短冊たんが  
 名告なあいひ今いま仏間ぶつまでい参まりいとい回まわりいて居いるいはい殺ころしいぬいはい製せいといの短冊たんが  
 此事こののい妻つまもいて救すくせいとい止とどまい蟬丸せみとい怒いりいてい扱さつい  
 嚮むかへい獨ひとり言いひ吾侪わがはい伎倆ぎがい親おのいひいるい奈何なもい蟬丸せみはい軀おのい  
 准まへい名なをい改かめて謀叛ぼうの企こころ其身そのの末すえは空蟬あのい売うのい浅猿あとい死し





彈丸



闇夜の敵  
彈丸と  
抑留と



彈丸と抑留と



を遠より人情を何とぞ思ひとまりて本心立えり夫婦はるる  
 てなれと携ふ軟を拂ひ退君子の一言駟馬も及むをいふる女の  
 妨とて縦你が縁者なりとる吾入用の短冊を不抽していつるの其身の  
 薄命玉此方掠奪て拔落して去るぬ其うちの枕を高く夜  
 の寝られど大事なめ其方よりといふやうを中拔すは只一刀  
 砍されば阿と玉なるは駭に蓮の姫は倉皇く走り来り此休  
 るより喃うかきおそれい吾休て人の孫最前もりて名告あひ  
 你が戻らぬ委細な語り力とるてとるお甲斐のふ何ぞとる  
 の残忍とるお殺せしめぞと懺慍齒の根もあぬ歎相は蟬丸の  
 血刀が身哩とまて傍より立より辯は和り姨は必むくも駭とるふ

か最前吾倚は見えぬひく守護命の内制衣の短冊をこの用  
 ちりるあれは速とく懐へ手なさくさむは歩駭とられぬ  
 まる命もろくど思ふ娘が紀念とてとるへせとと逃すとと那里  
 まで追欠く門辺の川の端まで漸く追付撲倒し難く守護と  
 奪ひとれが又とるつくは足が揚る蹴返して力あありて彼方の  
 川筋斗うつて歳とりれは何れつくとるべき急流れく踪跡も  
 忘れぬ蟬丸見るより南無三宝這奴が生死を見極めぬ何とや  
 人の悟が悪くさいい最前より最前さ此溪川に陥とれがよりや  
 助る支あふくと踵なめぐり裡面はいり何う意は点頂て一衣が死  
 骸の傍より立より首を發失と討はる手比の石を髻を縛り着

源九傳記卷三



て何<sup>なん</sup>に沈<sup>しづ</sup>め徐<sup>しゆ</sup>に衣裳<sup>いさう</sup>を剥<sup>む</sup>取<sup>と</sup>て吾<sup>わが</sup>著<sup>き</sup>て居<sup>ゐ</sup>り一<sup>ひと</sup>衣<sup>い</sup>服<sup>ふく</sup>を脱<sup>ぬ</sup>ぎ一<sup>ひと</sup>衣<sup>い</sup>が首<sup>くび</sup>まきと軀<sup>こゝろ</sup>は著<sup>き</sup>せその身<sup>み</sup>に一<sup>ひと</sup>衣<sup>い</sup>が衣<sup>い</sup>を著<sup>き</sup>う白<sup>しろ</sup>た帯<sup>おび</sup>を前<sup>まへ</sup>に誥<sup>ご</sup>び甲<sup>か</sup>敷<sup>し</sup>脚手<sup>けんしゆ</sup>の紐<sup>ひも</sup>引<sup>ひ</sup>き特<sup>とく</sup>室<sup>しつ</sup>の裡<sup>うち</sup>に秘<sup>ひ</sup>置<sup>お</sup>き一<sup>ひと</sup>紀念<sup>きねん</sup>の琵琶<sup>びわ</sup>をとり出し簀<sup>すい</sup>篲<sup>くわい</sup>の中<sup>なか</sup>に泳<sup>う</sup>ぐ躲<sup>かく</sup>く守<sup>まも</sup>衛<sup>ゑ</sup>の中<sup>なか</sup>ありとも推<sup>お</sup>戴<sup>たい</sup>て首<sup>くび</sup>はうけ錫<sup>しやく</sup>杖<sup>じやう</sup>とつて庭<sup>にわ</sup>はよりとも草<sup>くさ</sup>鞋<sup>せ</sup>をともとも跡<sup>あと</sup>見<sup>み</sup>りう斯<sup>かく</sup>ありおるが日<sup>ひ</sup>来<sup>き</sup>より吾<sup>わが</sup>侑<sup>ゆう</sup>の男子<sup>なんし</sup>と知<sup>し</sup>るものあけれが御<sup>ご</sup>堂<sup>だう</sup>人<sup>にん</sup>来<sup>き</sup>てえろるあは吾<sup>わが</sup>汝<sup>に</sup>穢<sup>せ</sup>は害<sup>がい</sup>せられ首<sup>くび</sup>をとりられりあはんと思<sup>おも</sup>ひ後<sup>ご</sup>日<sup>ひ</sup>よりやとく今日<sup>けふ</sup>の奈<sup>な</sup>何<sup>なに</sup>なる吉日<sup>きちじつ</sup>日<sup>ひ</sup>頃<sup>ころ</sup>の望<sup>のぞ</sup>む就<sup>つ</sup>ふべき便<sup>べん</sup>く品の手<sup>て</sup>をへるも大<sup>だい</sup>望<sup>ぼう</sup>成就<sup>じゆうじゆ</sup>の前<sup>まへ</sup>表<sup>ひょう</sup>あらんと思<sup>おも</sup>ひ一<sup>ひと</sup>襦<sup>じゆ</sup>袢<sup>たん</sup>の其<sup>その</sup>うもふり言<sup>こと</sup>号<sup>ごう</sup>せし吾<sup>わが</sup>妹<sup>い</sup>兒<sup>に</sup>環<sup>わん</sup>會<sup>かい</sup>と妻<sup>つま</sup>よ脊<sup>せ</sup>よと一日<sup>いちじつ</sup>片<sup>ぺん</sup>時<sup>じ</sup>もい

こと○そのもろろで我<sup>わが</sup>又<sup>また</sup>は非<sup>ひ</sup>業<sup>ごう</sup>の最<sup>さい</sup>期<sup>き</sup>はとげさきとありそれが那<sup>な</sup>縁<sup>えん</sup>の蓮<sup>れん</sup>と恩<sup>おん</sup>を仇<sup>あひ</sup>むる大<sup>だい</sup>逆<sup>ぎやく</sup>無<sup>む</sup>道<sup>だう</sup>渠<sup>け</sup>等<sup>とう</sup>が為<sup>な</sup>る悪<sup>あく</sup>鬼<sup>き</sup>とも羅<sup>ら</sup>刹<sup>せつ</sup>ともこそ懼<sup>おそ</sup>く思<sup>おも</sup>ひまんされといふも大<sup>だい</sup>恩<sup>おん</sup>受<sup>う</sup>く内<sup>うち</sup>主人<sup>しゆじん</sup>の今<sup>いま</sup>般<sup>ぱん</sup>に推<sup>お</sup>言<sup>ご</sup>ひ一言<sup>いちごん</sup>の食<sup>しょく</sup>とと思<sup>おも</sup>ひ意<sup>い</sup>あり我<sup>わが</sup>もあらぬ非<sup>ひ</sup>道<sup>だう</sup>奉<sup>ほう</sup>止<sup>し</sup>寔<sup>じつ</sup>や故<sup>こ</sup>語<sup>ご</sup>も匹<sup>ひつ</sup>夫<sup>ふ</sup>罪<sup>ざい</sup>あり玉<sup>たま</sup>を抱<sup>いだ</sup>き罪<sup>つみ</sup>ありと吾<sup>わが</sup>愁<sup>しゆ</sup>は土<sup>つち</sup>民<sup>たみ</sup>を嫌<sup>きら</sup>ひいともろろと見<sup>み</sup>竹<sup>ちやく</sup>園<sup>えん</sup>みつとくも此<sup>こゝ</sup>悔<sup>くわい</sup>あり原<sup>はら</sup>の玉<sup>たま</sup>丸<sup>まる</sup>あらんと斯<sup>かく</sup>る歎<sup>なげ</sup>きあるやうとせよと我<sup>わが</sup>の勤<sup>きん</sup>仕<sup>し</sup>もと執<sup>しやく</sup>日<sup>じつ</sup>に涙<sup>なみだ</sup>をくれろろが稍<sup>しやう</sup>あつて目<sup>め</sup>をまがらうと我<sup>わが</sup>のあやまてろろ我<sup>わが</sup>一<sup>ひと</sup>天<sup>てん</sup>の位<sup>ゐ</sup>を昇<sup>のぼ</sup>らる一<sup>ひと</sup>衣<sup>い</sup>の后<sup>ご</sup>よりあれろろ薄<sup>うす</sup>る國<sup>くに</sup>母<sup>ぼ</sup>も同<sup>どう</sup>くもえんもや非<sup>ひ</sup>命<sup>めい</sup>を死<sup>し</sup>するらる女<sup>むすめ</sup>



生れし幸あらむとや夫婦の二世とやうなる未来の縁のよし  
 羊座分て俟ねう。且又蟬とりの文字の旁ハ則單  
 單ハ一夜の訓あるもひとりのうらぬ因縁あらんや。一ハ法司  
 かくて親皇の御めらう逢ひまらふ王丸の箇様く夫河せ草  
 葉の陰より我即位のやうにまらふて悦ぶべし。南無函靈  
 出離頌證菩提南無阿弥陀仏。くくくくくと鉦うち鳴りて  
 立いづらうや。膳氏日の木のぐらうと木蔭のいつの諸味醱六容子  
 ののくれて食まの反逆人の小露の蟬丸此より縣令(注進な  
 を俟ていよと欠出まやりもささど錫杖とりのべ引とむむら  
 ろう拂いヌもゆんと跪ども大力無双と押つけられ手足を盡

らうと蟬丸さると去微笑妻や袒母の菩提のよめ助けく  
 ハ只とも蟻の穴より堤の壁言妻よふ稚子のそれあらで鳴音  
 はおのが在処とあられ飛で燈より其虫の自業自待の汝が  
 最期助けなくとも人か螫虫人を傷ふ毒虫の已に殺さる一殺  
 多生殺生るまると脊骨の上は唯手の足までふとみられが苦とい  
 ふまも醜醜六の眼飛出死てり。四下えまらく死骸を蹴やう。  
 尔あらぬ休は鉦赤あらう。悠々として歩むく此と日全く暮  
 れて如法闇夜の更るれば物のあいらぬ分らねども一竹助道が向  
 ふより。誰か知らむと来る者あり蟬丸斯と視るより左手の  
 くく一尻尻のけが彼も同じく左手(より)右手(ひら)けが對ふん又



めて 右の方より立塞るるに面倒と惹退て往人として後迎より  
 柱杖の先は林足と合手やうと挑む金剛力此方(曳)彼方(曳)無  
 言躑躅の争ひは蟬丸焦燥てあり拂ふ柱杖のさねや彼者  
 當りやあけん辟易と二歩三歩退くいま蟬丸のがれて進行  
 うるも心つた曲者まねとあけられ銀ぬきとすり銚  
 鏡うりうり。夢をめでてみ曳と音のゆる身をそとに袂  
 うるそのつみ跡はうらやう蟬丸の那里とんき病失ぬ畢  
 竟は友の蟬丸と挑む戦く人誰そ未くの巻は讀めて知る  
 べく。

蟬丸傳記

半月夜話卷之二畢

種相表

蟬丸

飯島三省



